佐田町の遺跡

西須佐地区

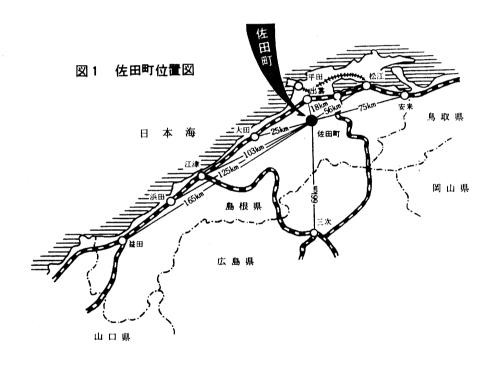


9年3月

町教育委員会

埋蔵文化財詳細分布調査報告書

佐田町〔3〕西須佐地区



1989年3月

島根県佐田町教育委員会

発刊にあたって

昭和61年から3か年計画で実施した、本町の埋蔵文化財詳細分布調査は、今年度の 西須佐地区の調査をもって完了することとなりました。

この地区の中で特筆したい遺跡は、八幡古墳、八幡宮別宮跡、高櫓城を中心とした城 郭群と、『出雲国風土記』の中の「波多川に鉄有」の記述にさかのぼることが考えられ ている数多くの製鉄遺跡などです。

八幡古墳は、その形式から推定されて、古代における山陽と山陰の文化の流れを知る 手がかりとなるものであります。

八幡宮別宮跡は、鎌倉期における中央とのつながりを求めた地方の願望。また数多くの城郭群は、戦国期の人びとの動向や政治、文化の流れを追求する一つの手がかりとなるものと思われます。

製鉄遺跡は、古代から近世末期までの長いあいだ、この地方の住民のくらしに大きなかかわりをもっていたことは、諸史料や地元伝承、その数の多いことなどからもうかがい知ることができるものであります。

今年度の調査結果は、さきに発刊された第1集『東須佐地区』、第2集『窪田地区』 の報告書とともに、今後の本町の歴史の解明に役立つことを、こころから期待するもの であります。

調査にあたっては、わずかな史料をもとにして町内の山野をあますところなく踏査された調査員の方がたと、適切な指導と助言をいただいた蓮岡法暲、勝部昭、杉原清一の諸先生と、島根県教育委員会文化課内の諸先生方に厚く感謝申し上げます。

おわりに、本調査にご協力いただいた町内各地の多くの方がたに深く感謝の意を表して発刊のことばとします。

平成元年3月

島根県佐田町教育委員会 教育長 **佐 貫 光** 弘

- 1. この報告書は、佐田町教育委員会が、文化庁及び島根県の補助をうけておこなう佐田町内の埋蔵文化財調査のうち、昭和63年度に実施した「西須佐地区」の調査の報告である。
- 2. 調査の体制は次のような組織で行った。

調査主体 佐田町教育委員会 佐貫 光弘 (教育長)

調查指導 蓮岡 法暲 (島根県八東郡八雲村立八雲中学校教頭)

勝部 昭 (島根県教育委員会文化課課長補佐)

鳥谷 芳雄 (島根県教育委員会文化課主事)

調查員 田中 迪亮 (佐田町文化財調査委員)

岩崎 正敏 (佐田町文化財調査委員)

永島 安徳 (佐田町文化財調査委員)

佐々木敬志 (佐田町文化財調査委員)

桐原 幹夫 (佐田町文化財調査委員)

調査補助員 山崎 順子

事務局 石崎 勉 (佐田町教育委員会教育次長)

栗原 豊 (佐田町教育委員会社会教育係長)

深井 健一 (佐田町教育委員会社会教育主事補)

調査協力

調査にあたっては次の方の協力、援助をうけた。記して謝意を表する。

神田喜友、一ノ名清、藤原乙市、佐貫喜真、若槻甚市、田中博好 杉山政法、小林有好、角森嘉市、土出治諸、今岡秋吉、安食照雄 長島為市、今岡宏一、安食虎良

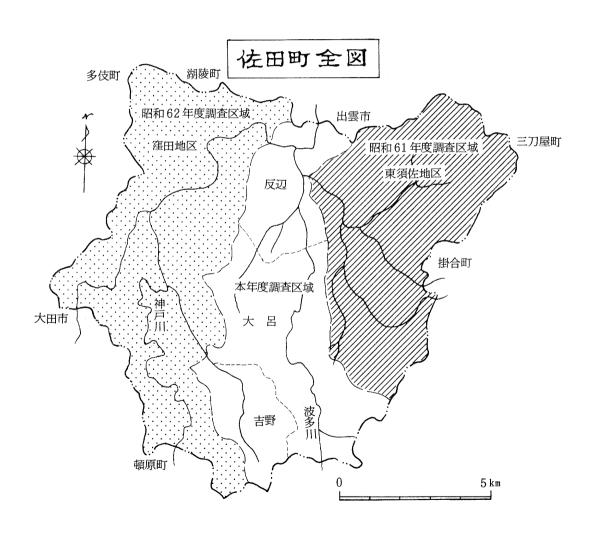
- 3. 本書の執筆・編集は、蓮岡法暲、勝部昭、鳥谷芳雄の助言を得て、田中迪亮がおこない、栗原豊、山崎順子がこれを助けた。
- 4. 本書に記載する遺跡の名称及び地名は、西須佐地区の切図と土地台帳から収録した「小字名」を基にしたが、一部は地元伝承の通称名も取り入れた。
- 5. 本書に記載する図面の方位は、すべて調査時の磁北である。また、調査に使用した地図は、主として「中国山地基本図」5千分の1地形図である。
- 6. 城跡略測図の地ぼう表現について、ケバ線は等高線に直交する角度を示し、その下部 に遺構がある場合は、点線で区画して壁の上下を表現する。

ケバ線の先端部に遺構がない場合は、ケバ線を引下したまま、あとは等高線によって 高さを現わすこととした。

また、急斜面はケバ線の間隔を密にし、緩斜面は間隔を疎にした。等高線の間隔は、

10 mの高度差を現わす。

- 7. 調査成果は、分布図及び一覧表とするほか、「埋蔵文化財包蔵地カード」を二部作成 し、一部は島根県教育委員会に提出し、一部は佐田町教育委員会において保管して、活 用の資料とする。
- 8. 本書に記載した遺跡は、踏査による地表観察で得られたもので、平成元年1月末現在までのものである。



第2図 今年度調査区域図

表紙題字 佐田町 町長 土岩 勲		
序 文 佐田町教育長 佐貫光弘	図- 5	坂本古墳出土遺物実測図 10
例言	図- 6	屏風山城跡略測図11
	図 - 7	高櫓城跡、明神山城跡
本文目次		略測図 12
I 西須佐地区の歴史的環境と	図- 8	秋森城跡略測図 14
遺跡の概要 1	図- 9	高西城跡略測図 15
Ⅱ 西須佐地区遺跡一覧表 3	図 — 10	湯村城跡略測図 16
Ⅲ 西須佐地区遺跡分布図 6	図 - 11	才ノ峠城跡略測図17
IV 遺 跡 各 説 8	図-12	茶磨山城跡略測図 18
1. 古 墳 8	図 − 13	三の宮城跡略測図18
2. 城 跡	図-14	竜体谷城跡略測図 19
大字反辺地区の城跡 11	図-15	丸山城跡略測図 19
大字大呂・波多川流域の城跡 16	⊠ − 16	八幡山城跡略測図 20
大字大呂・東山中地区の城跡 21	図- 17	坂本・堂床城跡略測図 20
大字大呂・御幡地区の城跡 24	図-18	東山中城郭群略測図 22
大字大呂・大山地区の城跡 28	⊠ − 19	東浦城跡略測図23
大字吉野地区の城跡 30	図-20	神馬原城跡略測図23
注32	図-21	高丸城跡略測図 24
3. 生産遺跡 33	図 — 22	大丸城跡略測図25
鈩 跡	図-23	中屋城跡略測図25
窯 跡	図 - 24	坂根城跡略測図26
4. 祭祀跡34	図 - 25	柏王城跡略測図26
5. 古墓・塚 35	図 — 26	前岩瀬城跡略測図 27
V むすび 37	図 - 27	重羅城跡略測図27
参照文献39	図 - 28	大山城郭群略測図 28
	図-29	岩瀬城跡略測図29
	図-30	打尾城跡略測図29
揷入図目次	図 - 31	ゆうげ城跡略測図 30
図-1 佐田町位置図中表紙	図 - 32	吉野城跡略測図 31
図-2 今年度調査区域図例言	図 - 33	古墓・石塔
図-3 西須佐地区遺跡分布図 6		石塔の残欠実測図 36
図-4 八條古墳宝測図		

Ⅰ 西須佐地区の歴史的環境と遺跡の概要

西須佐地区は、佐田町を南北に三分した場合、その中央部を貫通する地域で、反辺、大呂、 吉野の三大字を包括する。

この地域を流れる主な川は波多川で、飯石郡掛合町波多を源流として北に貫流し、佐田町役場近くで神戸川に合流する。

地形は、波多川上流となる南部は急峻な地形で、両岸の山地は起伏に富んでいる。

南端の掛合町との境になる「羽幸大山」(727 m)を最高地とし、最低地は佐田町役場付近の標高 70 mである。

・ 東山中、御幡、大山、吉野の各地区は山頂部に近く、緩斜面の中に耕地や居住地が点在する。 波多川流域は上流部で溪谷をなすが、大字大呂・上組付近から沖積平野が断続的にひろがり、 段丘も漸次発達し、耕地や集落も増えてくる。

古代

地域の歴史的沿革は『出雲国風土記』(注1)によると、「飯石郡須佐郷」に属し、里が三つあったと伝え、大字反辺の「多倍社」は神名帳に登録された官社である、と記している。

波多川については、源流から流路の説明のあとに「鉄有」と記して、既にこの地方で砂鉄を 原料とした「たたら製鉄」が行なわれていたことを示している。

古代の遺跡は、大字大呂の「八幡古墳」(町指定史跡)と「坂本古墳」がある。

また多くの鈩跡の中には、野鈩と推定されるものがあり、古代にさかのぼるものの存在も考えられるが、時期を特定された遺跡はない。

そのほか、古代以前にさかのぼる遺跡、遺物は今までの調査では発見されていない。

中世

中世の遺跡は、山城跡が多く、その数は30か所を超える。

中でも大字反辺の「嵩櫓城」は、須佐地区の中心となった城である。史料(注 2)に登場する城主は亀井永綱、本庄常光、熊谷広実で、尼子氏の台頭期から毛利氏との雲芸攻防戦、尼子の復興戦までの舞台となった城である。尼子氏没落後は毛利氏の支配するところとなり、慶長5年(1600)まで続いた城である。

この高櫓城を中心にして、支城と伝えられている城跡も多い。集落ごとに城郭群が配置されている状態をみると、この地域の中に、なぜこれほどに山城の数が、という疑問も生まれるが、山城築城期といわれる南北朝のころから、戦国時代末期の長い年月の間に、地域の政治、経済、文化の中心となる本城から、その領域の保全と強化をはかるために配置された小さな砦にいたるまで、臨時的なものから再利用、再々利用など社会情勢や生活の変化に応じた配置がなされたことを考えれば、決して異常な数ではないと思われる。

城跡の中から、鈩跡や鍛冶跡が発見されたものもあり、東山中地区では城の防塞として築かれた土塁の材料に鉄滓が使われていた例もあった。

大字大呂には、出雲国内の8か所の八幡宮、すなわち「八所八幡」と呼ばれる社の中の1社「須佐八幡宮」があり、現在は大呂神社に(注3)合祀されている。大呂神社社伝や地元の伝説によると、源頼朝が勧請したものといわれている。

この時代より後、石清水文書によると「建武四年十二月十二日、将軍足利尊氏当宮の顕密両 宗興業の為、出雲須佐郷地頭職を寄進」(注4)とある。(石清水八幡宮領)

大字大呂の御幡地区には、かつて「瀧上山・柏王寺」があって、堂塔四十八坊があったが、 尼子、毛利氏の戦禍によって全山焼失したと伝えられている。

この時代のものと推定される古墓は、宝篋印塔、五輪塔、石積みの墓などである。これらは 主に高櫓城跡周辺の山麓に点在している。

近 世

近世の遺跡は、製鉄遺跡、すなわち鈩跡が多い。

その中で操業年代が明らかなものは、近世末期のもので、規模の大きい高殿鈩である。その ほかの鈩跡は小規模なものが多く、野鈩跡と推定されるものが多い。

製鉄業と地域住民との深いかかわりは、地名の分布からも見受けられ、「鑓、鈩、鉧、鉄、鉄穴、鋳、鍛冶、金屋子」などの字を前後に取り入れた小字名が多い。

祭祀跡は、須佐八幡宮跡と足利尊氏が社領を寄進した石清水八幡宮の別宮跡が知られている。

大呂地区の二百十石の社領については、松江藩主・二代の綱隆が寛文二年(1662) に広瀬藩を分封したことで、大呂地区が広瀬藩に編入され、その社領は松江藩内の大字反辺に社殿とともに移されている。

寺院、堂なども多くあったことが、地名の分布によって知ることができる。大呂地区の一部だけでも「清泉寺、大願寺、善正寺、久光寺、慶雲庵」のほかに「寺床、堂、鐘突免、油田、 比丘尼垣内、堂床」などがあり、生産遺跡と同様に住民との深いかかわりを示している。

- 注1、加藤義成校注『修訂出雲国風土記参究』(昭和56年)参照
 - 2、勝田勝年校注『合戦雲陽軍実記』。『飯石郡誌』『島根県史』「須佐神社棟札写」
 - 3、渡邊彝著『出雲稽古知今図説』所載「八所八幡宮之事」意字郡八幡村平濱、能義郡安田村安田、飯石郡大路村須佐、飯石郡佐見村油木、仁多郡馬場村横田、大原郡木次村來次、大原郡上佐世村佐世……以下略

『大呂神社社伝』(佐田町大字大呂) 『佐田町の民話と民謡』(神馬原伝説)

4、『佐田町史』(昭和 51 年刊) 『石清水八幡宮領、須佐別宮の起源及び広瀬藩成立による 社地移転」。

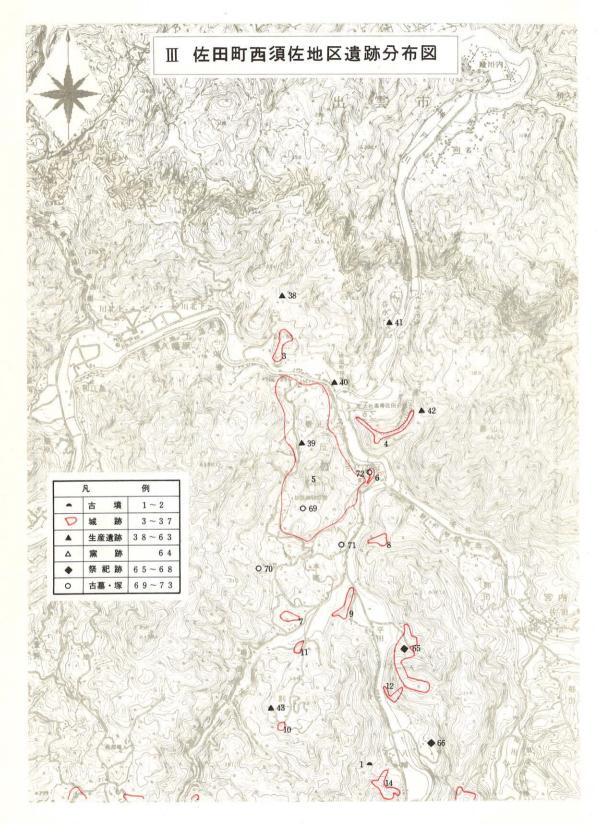
「出雲国須佐郷、相模殿三十丁三反歩」(出雲大社文書)とあるように、尊氏が須佐郷北 条氏の荘園を石清水八幡の社領として献じたことになっているが、社領と同時に八幡宮の別 宮ができたかどうか、不明である。

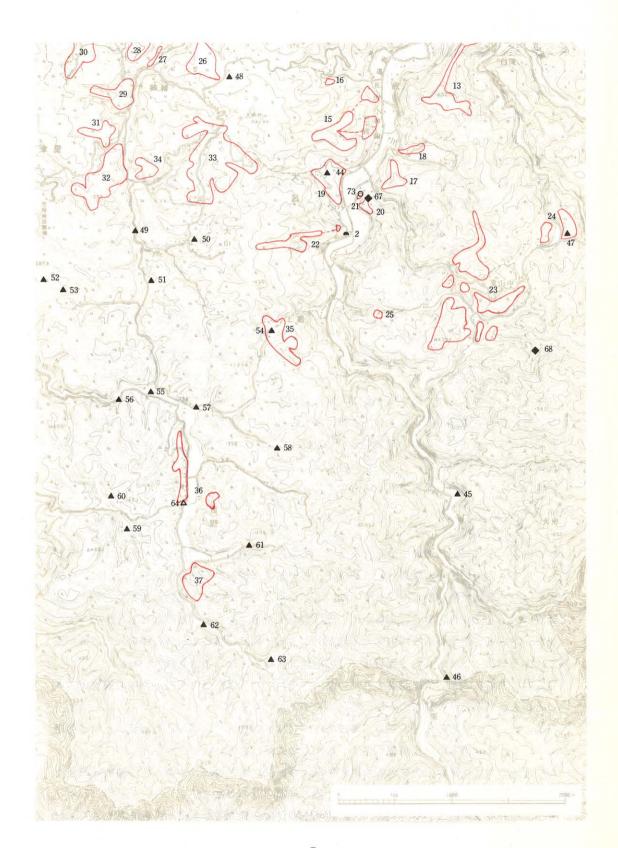
Ⅱ 西須佐地区の遺跡一覧表(図面番号は遺跡分布図番号と一致する)

図面No.	種	別	名	称	地目	現状	所 有 地	所 有 者
1	古	墳	パ 篠	古 墳	墓 地	墓 地	大字大呂 222	佐 貫 喜 真
2	古	墳	坂本	古 墳	畑	畑	大字大呂 665-3	森 山 清
3	城	跡		城 跡	Π	Ш	大字反辺 2724 - 1	土出治諸
4	城	跡	屏風山	城跡	Щ	Щ	大字反辺 2900~	安食芳一
5	城	跡		城 跡	Щ	Щ	大字反辺 2614-3	安食周一外
6	城	跡	明神山	*	Щ	山、墓地	大字反辺 3153	安食周一
7	城	跡	秋森	城 跡	山	Ш	大字反辺 2995	土谷修一郎
8	城	跡	* がりだ曽我里に	峠 城 跡	Щ	Щ	大字反辺 3263~	安食周一外
9	城	跡	高西	城 跡	Щ	Щ	大字反辺 2271~2281	和田国雄外
10	城	跡		田城跡	Ш	田	大字反辺 3040~	岸 昭一
11	城	跡	前崩小	、丸 跡	Щ	牧 場	大字反辺 3051	伊藤兵市
12	城	跡	湯村	城 跡	Щ	山	大字反辺 2201	和田国雄外
13	城	跡	ずノ 時	城 跡	Щ	Щ	大字大呂 1725 内 1	今川須佐男外
14	城	跡	茶醬山	城 跡	Щ	Щ	大字大呂 2407	一の名 清
15	城	跡	登の質	。 城跡	Щ	Щ	大字大呂 2512	石 橋 美 法
16	城	跡	等 策	城 跡	H	田、墓地	大字大呂 3753	杉山和男外
17	城	跡	からない なり竜 体谷	,城跡	Ш	山	大字大呂 2003-5	森山栄一郎外
18	城	跡	登の警	小丸跡	Щ	山	大字大呂 1668 - 1	桐原一男
19	城	跡	丸山	城 跡	畑	畑	大字大呂 3864~	森 山 徳
20	城	跡	八幡山	城跡	Щ	Щ	大字大呂 1999	小林有好
21	城	跡	庭反	城 跡	畑、墓地	畑、墓地	大字大呂 804-2	馬瀬万市外
22	城	跡	坂本・営	就城跡	Щ	山	大字大呂 2616-1	藤原良夫
23	城	跡	東山中	城郭群	山、耕地	山、耕地	大字大呂 2066~	板垣昭男外
24	城	跡	東浦	城 跡	Щ	山	大字大呂 2092-1~	横山輝美外

図面No.	種 別	名 称	地目	現状	所 有 地	所 有 者
25	城 跡	神馬原城跡	耕 地	耕 地	大字大呂 1848	板垣定義
26	城 跡	高丸城跡	Щ	Щ	大字大呂 2825-1	和田豊志
27	城 跡	大丸 城跡	田、宅地	田、宅地	大字大呂 2877	田中博好
28	城 跡	中屋城跡	Щ	Щ	大字大呂 2913	渡 部 悦 治
29	城 跡	坂 根 城 跡	山、耕地	山、耕地	大字大呂 2989	藤 原 武
30	城 跡	柏 王 城 跡	宅地、田	宅地、田	大字大呂 2966~	若槻俊徳 _外
31	城 跡	前岩瀬城跡	Щ	Щ	大字大呂 3017	内藤邦夫
32	城 跡	重耀城跡	山	Щ	大字大呂 3291	佐貫輝由外
33	城 跡	大山城郭群	山	Щ	大字大呂 2727 - 3~	桐原直市外
34	城 跡	岩瀬城跡	Щ	山	大字大呂 1271	森山一吉
35	城 跡		山、田	山、田	大字大呂 1563~	神田英一外
36	城 跡	ゆうげ城郭群	山、耕地	山、耕地	大字吉野 237~	神田正則外
37	城 跡	苦 野 城 跡	山	山	大字吉野 602	神田房雄
38	生産遺跡	垣 內 鈩 跡	Щ	Щ	大字反辺 2730	山本茂生
39	生産遺跡	士 落 鈩 跡	Щ	Щ	大字反辺 1473-2	桐原幹夫
40	生産遺跡	模 原 鈩 跡	田	田	大字反辺 1608	長島 豊
41	生産遺跡	香水笋跡	田	田	大字反辺 1818	安食一成
42	生産遺跡	矢源寺奥 跡	Щ	Ш	大字反辺 1930	安食文吉
43	生產遺跡	別 旂 鈩 跡	宅 地	宅 地	大字反辺 546-1	岸 圭一
44	生産遺跡	続 猫 鍛 冶 跡	畑	畑	大字大呂 553	桐原春雄
45	生産遺跡	曲ノ挙動跡	田	田	大字大呂 1809-1	藤原倉年
46	生産遺跡		田	田	大字大呂 1942-1	藤 原 薫
47	生産遺跡	東山中新跡	Щ	Щ	大字大呂 2087 - 1	横山輝美外
48	生產遺跡	党 货 笋 跡	宅 地	宅 地	大字大呂 899	野 尻 秀 夫
49	生産遺跡	岩瀬ビ鈩跡	Щ	Щ	大字大呂 3052-1	神田秀義

図面No.	種別	名 称	地目	現 状	所 在 地	所 有 者
50	生産遺跡	大 苗 鈩 跡	山	Щ	大字大呂 2681-9	和田良則
51	生産遺跡	だ ノ ド 鈩 跡	畑	畑	大字大呂 1472~	神田隆一
52	生産遺跡	大模谷1号鈩跡	山	山	大字高津屋 460	日高国夫
53	生産遺跡	大模谷2号鉅跡	Ш	Щ	大字大呂 534-1	角森嘉市
54	生産遺跡	拧能1·2号鉅跡	田	Ш	大字大呂 1570	森山真人
55	生産遺跡	岩野古鈩跡	宅 地	宅 地	大字吉野 24	石崎繁夫
56	生産遺跡	岩 原 鈩 跡	Ħ	田	大字吉野 3	石崎繁夫
57	生産遺跡	客ノ木鈩跡	宅 地	宅 地	大字吉野 77	大野恒雄
58	生産遺跡	小草江迫鈩跡	田	草 地	大字吉野 86	神田喜友
59	生産遺跡	新田原新跡	宅 地	宅 地	大字吉野 462	板垣ヤス子
60	生産遺跡	菅 沪 鈩 跡	Щ	Щ	大字吉野 669	三浦芳明
61	生産遺跡	横屋奥鉅跡	田	田	大字吉野 300~	児玉武夫
62	生産遺跡	梅ケ谷尻鈩跡	Щ	Щ	大字吉野 604	児 玉 幸 雄
63	生産遺跡	堂ノを新跡	田	田	大字吉野 391	児 玉 幸 雄
64	生産遺跡	岩 野 瓦 窯 跡	畑	畑	大字吉野 640	神田秀一
65	祭 祀 跡	湯村神社跡	Ш	山	大字反辺 3009	神 社 地
66	祭 祀 跡	熱田宮跡	神 社	神 社	大字大呂 101	神 社 地
67	祭 祀 跡	八幡宮別宮跡	Щ	Щ	大字大呂 1999	小林有好
68	祭 祀 跡	河内神社跡	Щ	Щ	大字大呂 2057	和田初則
69	古 墓	高櫓城殿様墓	墓 地	墓 地	大字反辺 1153	(公有地)
70	古 墓	横屋奥古墓	Щ	Щ	大字反辺 1101	永井辰郎
71	古 墓	前・山伏塚	田	H	大字反辺 1215-1	伊達萬蔵
72	古 墓	明神山古墓群	墓 地	墓 地	大字反辺 3153	安食周一
73	古 墓	庭反古墓群	墓 地	墓 地	大字大呂 804-2	馬瀬萬市外





IV 遺跡各説

1. 古墳

八幡古墳 (佐田町指定史跡)

1. 位置と墳丘形態

この古墳は古くから開口していたものである。 1987 年に佐田町指定史跡にされたことを機会に実測を行った。

位置は、簸川郡佐田町大字大呂・八幡地区の波多川左岸。元西須佐小学校裏から西に登る谷沿いの段丘が行き止まりとなる山裾にあり、近世末期から墓地となっている削平地の先端部にある。(1987年3月発行の島根県遺跡地図において、439番に該当する古墳である)

墳丘の形態は、墓地と耕地の造成のために削り取られ、もとの形は不明である。現状は蓋石が露出し、羨道の入口付近は崖の先端部となっていることから、一部は欠失しているものと推定される。

2. 内部構造

内部主体は玄室と羨道の区別のない、いわゆる無袖形の横穴式石室である。

羨道と玄室内には、外側から割石を含む土砂が厚く堆積しており、正確な計測はできないが、 およそ次のような規模である。

長さ $4.0 \, m$ 、幅 $0.8 \, m$ 、高さ $1.4 \, m$ で南東に開口するプランであるが、羨道の前が欠失して おり、もとの長さは若干長くなるものと推定される。

石組は5枚の蓋石がのこり、前側の蓋石は崩れ落ちている。奥壁は2枚の巨岩を使い、すき間を割石でおぎなっている。

側壁は、基部を大形の腰石で整え、上部にあがるに従って小さくなる割石を、ほぼ垂直に積みあげている。

3. 八幡古墳の特色

本古墳の所在地周辺の遺跡の分布をみると、東須佐・大字朝原の切石古墳(小形の横穴式石室)、大字原田の塚松山古墳群(箱式石棺)、和田古墳(横穴式石室と推定)、その周辺の横穴群をはじめ、遺物散布地が点在している。そこからは、弥生時代と推定した磨製石斧や古式土師器などが発見されており、古墳時代に先行する人々の歴史があったことは明らかである。

また、本古墳の位置から2km南側の上組地区からも、ほぼ同規模のものと推定した古墳が発見され、その近くで出土した須恵器は、古墳時代終末期のものと推定されている。

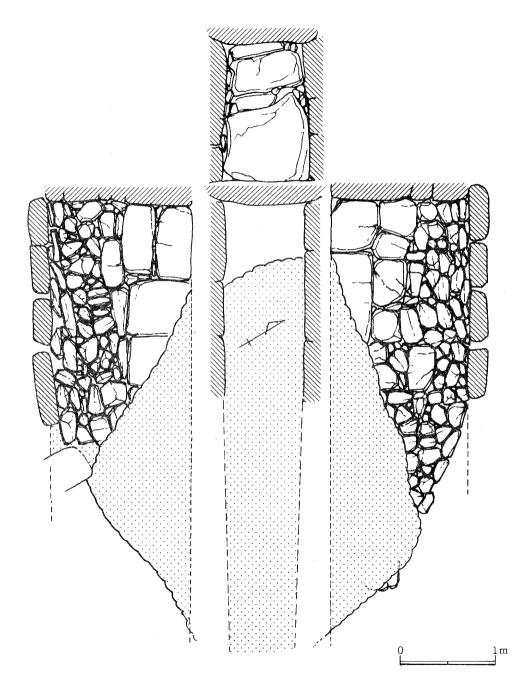
当地方の古墳に大形古墳は発見されていない。その中で八幡古墳の石室は比較的規模が大きいことから、当地方の首長級の人物の墓とみることができる。

石室の形式についてみると、玄室、羨道の区別のない無袖形で、幅が狭く細長いという特徴がある。この傾向のものは山陽側に多く、後期古墳に盛行している。

この地域の南部、神戸川上流の頓原町大字八神の比丘尼塚古墳は、やや大形の横穴式石室である。その形式は狭長で無袖で、八幡古墳と同じ部類のものである。

中国山地脊梁部に位置する当地方が、山陽地方の影響を受けることは十分考えられることで

本古墳は遺物とそ検出できなかったものの、形式的には陰陽古墳文化の交流を示唆しているものといえる。



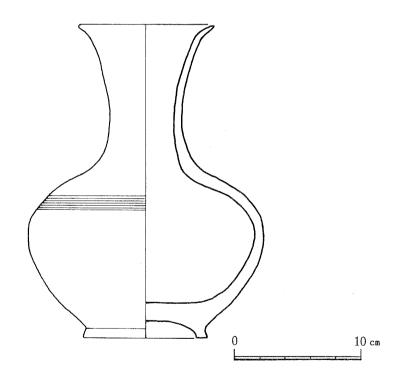
第4図 八幡古墳実測図

坂本古墳

この古墳は、大字大呂・上組公民館裏の斜面の畑に、石室の構造と思える石材が部分的に残っている。蓋石や石室を構成するほとんどの石材は消失しているが、土中から頂部だけ露出している石材の配置から石室の規模が推定できる。主軸を南北におき、ほぼ真南に開口していたものとみられる。長さは 4.0~m、幅は約 0.9~mで、八幡古墳とほぼ同形の規模のもののようである。

羨道の部分は削り取られた崖となっており、崖面には大形の石材が積み重っている。

この斜面の突端で須恵器片が検出されたが、崖下の藤原家には、宅地造成の際に土中から出土した完形の須恵器(長頸壺) 1 個が保存されている。須恵器はこの古墳のいずれかの部分に埋納されていたものと考えられ、その形式から本古墳は古墳時代の後期から奈良時代にかけて造営されたものと推定される。



第5図 坂本古墳出土遺物実測図

2. 城跡

大字反辺地区の城跡

この地域は神戸川と波多川の合流点を中心に開け、古くから各地方に通ずる街道の分岐点であることから、軍事的、経済的に重視されていたことが考えられる。

城跡は周辺の山々に緻密に配置されており、その中心となっていたのが高櫓城である。しか し、周りの山城のすべてが高櫓城の支城であったとは考えられず、中には攻城の拠点として構 築された、いわゆる付城、向城などの存在も考えなければならない。

そのためには詳細な史料の収拾や検討が必要であるが、史料調査は本稿が求めるものではないので、城郭の実態についてその概略を述べることとする。

○ 舟津城跡 (標高 167 m) 一略測図を省略一

反辺地区の西北端、神戸川沿いの山城で、南北に続く二つの丘陵からなる。

二つの丘陵の鞍部は堀切となって旧街道の峠となるが、この街道は須佐方面から大字八幡原の二百山城跡の山裾を経由して、出雲に至る要路であることから、街道の押さえとして配置されたものとみられる。

複雑な遺構はなく、階段状の曲輪を配置した単純な構造であるが、北側丘陵の山頂部の曲輪 群は広く、居住地跡と推定される地形を残している。

○ 屏風山城跡 (標高 210 m)

神戸川、波多川の合流点南側にあり 高櫓城に川を挾んで対向する位置にあ る。

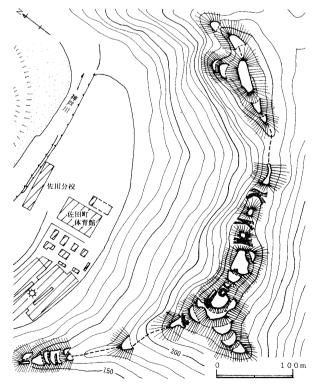
遺構は、やせ尾根上に曲輪群と堀切 陸橋などを連続させ、西側は攻撃不可 能な断崖となって、北側の丘陵頂部ま で続く。

この丘陵の東側の鞍部は広く、佐田 町北端の「黒山」山裾となる。 (この 鞍部には小規模な鈩跡がある。)

西側山麓の沖積地は「和立原」と呼ばれているが、地元の伝承によると、 もとの地名は矢立原で、高櫓城との矢 戦のあと、和議が成立したことから和 立原になったという。

○ 高櫓城 (標高 307 m)

須佐地区の中心となる城跡で、近世 の地誌(注1)によると、その支城は 須佐地区全域にわたって配置されてい



第6図 屏風山城跡略測図



第7図 高櫓城跡、明神山城跡略測図

たことを伝えている。

歴代の城主のうち、永禄年間は尼子方の家臣・本庄常光が城督であったとされる。常光は石見銀山山吹城主をも兼ねており、雲芸攻防戦記(注 2)にもしばしば登するが、毛利方に移った直後に、彼の強さが禍いして元就に警戒されるところとなり、永禄 5 年(1562)の秋、斐川町学頭においてその一族と共に粛清された悲運の武将である。

尼子氏解体後は毛利の家臣・熊谷広実がこの城を守り、戦国時代末期まで存続していた城である。

城の縄張りの広さは、町内の城の中でも抜群のものである。

全体の構造をみると、高櫓山の頂部を主郭として、周囲の丘陵、尾根に大小の城郭を配置し、主峰の孤立化を防いでいる。すなわち一城別郭方式の城である。

主郭部の構造は、南北にのびる広い削平地と北側の台地に八幡神の祠を建て、その東端下の通路は北にのびる稜線に結ばれるが、その間を小堀切で遮断している。この主郭部北側の側面は攻撃不可能な断崖であり、北側の曲輪の先端も約10mの落差をもつ崖となる。しかし、この崖下の稜線にも小曲輪と多重堀切、また巨岩のすき間を利用して蛇行する通路が下降して、山腹の曲輪群に達している。この崖下から下降する通路は、北側の搦手とも考えられるもので、このように急峻な自然地形を利用して、やせ尾根上に防塞を構築する技法は、山城築城期の初期の特徴ともいわれている。

主郭部から南西に下る斜面には第二郭、第三郭の広い曲輪が設けられ、通路は迂回しながら この側面を通るが、第二郭の直下斜面には通路に並行する曲輪があり、これは横矢掛りに相当 するものである。

また第三郭の下部斜面には、等高線に直交する6条の竪堀群と、南側にも1条の竪堀がある。 この竪堀群は地方によってささぎ畦・馬かくしとも呼ばれるが、出雲では槍溝または連珠砦と 呼ばれ、最近では「散型阻塞」(注3)の用語が使われている。この畝型阻塞は緩斜面を強化 するために構築されたもので、この緩斜面を攻め登る敵の横移動を封じ、上部からの落し石や 狙撃の効率を高める、いわば一種のわなである。

この竪堀群の直下には腰曲輪が設けられているが、これも敵をこの区域に誘導する効果を狙ったものと思われる。

西側山麓の目田池の東部一帯に段差をもつ平地がひろがり、現在は森林公園に利用されているが、この区域は根小屋群(注 4) 跡と推定され、池の近くで円形石組みの井戸跡が検出された。目田池の水深は浅く、湧水量も乏しいことから、本来の目的は根小屋群への侵入を阻む堀として設けられたものとみられる。

主峰の南側の各丘陵と東部の山腹各地に曲輪群が認められ、その一部には八幡宮や寺院も建てられている。

森林公園南側の丘陵には、山腹に空堀を囲らせ、頂部には小規模な居館が存在した形跡もみられる。北側に下降する士落谷一帯にも居館が存在したと伝えられている。 (この谷の東部丘陵には、鞍部の削平地の2か所で焼結した土層と鉄滓が検出された。)

高櫓城の縄張り内には山裾から目田池のある山腹にかけて、各所に谷川や自噴する水源がある。目田池付近から主郭となる独立峰の頂部までの比高差は60 mあるが、この山腹一帯では湧水地は見当らない。

地元の伝承によると、山頂には馬洗い池があり、その名は「星の井戸」とも呼ばれたという ことから検索を行った結果、その湧水池は主郭部の南端に近い位置で確認された。現状は縁石 が内側に崩れ落ちて、大部分は土砂で埋没しているが、僅かにのこる凹地には渇水期でも滞水 していることから、井戸跡と推定したものである。この山頂まで馬を上げていたことは考えら れないし、馬を洗うほどの水量があったか否かはともかく、独立峰の頂に湧水池が存在する理 由は、被圧地下水現象(注 5)によるものと考えられ、城の迸地にあたって築城の条件に適し た場所であったといえる。

また、第二郭の東側、主郭部の崖下でも岩場からの渗透水の溜まる凹池があり、渇水期でも 枯渇したことがないといわれている。

○明神山城跡 (標高 95 m)

明神山城跡は高櫓城の縄張りの中の出丸で、須佐川と波多川の合流点に南側から突出た小丘陵にある。遺構は、頂部から下る稜線と緩斜面に曲輪群が設けられており、曲輪の一部は墓地に転用されている。

この墓地の一角に石を積み重ねた高まりがあったが、この石は宝篋印塔と五輪塔の残欠であった。この城跡の南側の丘陵には石積みの古墓群と、城督、熊谷広実の墓碑があり、南側の山腹には熊谷家の菩提寺であったと伝えられている久光寺がある。

○秋森城跡 (標高 130 m)

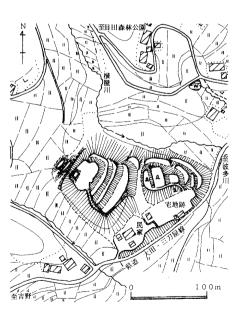
高櫓城の南の反辺谷川に面した小丘陵上に設け、 この山も明神山と呼ばれている。

山頂を主郭として、南側に下る斜面に階段状の腰 曲輪を回らせ、登り道は西側に迂回する堀割の底を 通って頂部に達する。

頂部には祭壇跡とみられる高まりがあり、傍に自然石をくり抜いた手洗鉢が残されていた。この背後となる北側斜面は削り落した壁となっているが、この裾部は二重の堀切で遮断している。

東側の小さい丘陵に続く鞍部は、幅広い堀割となっている。この丘陵にも頂部から東、北側の斜面に 曲輪の跡がみられるが、南側には宅地跡があり、かつては館があったものと思われ、近くに古墓がある。 地元の伝承によると、この城は高櫓城の見張所が おかれたところといわれている。

○曽我里峠城跡 (標高 198 m) 一略測図を省略一



第8図 秋森城跡略測図

波多川の右岸に張り出した尾根の頂部が主郭部と推定された。高櫓城から東側の眼下に見下す位置にあり、山頂から西に下る斜面に曲輪群が展開する小規模な城跡である。

東側の鞍部は幅広い堀切となる峠で、西須佐地区から東須佐地区に至る古い街道が通ることから、街道の押さえと、高櫓城の死角となる部分を補完する城であったと思われる。

○ **高西城跡** (標高 110 m)

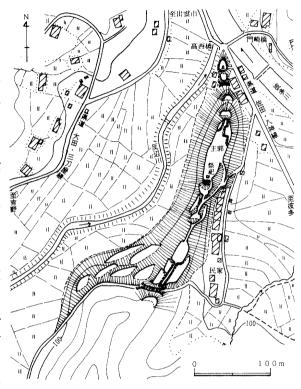
波多川と反辺谷川の合流点に南方から 岬状に突出する細長いやせ尾根上に設け られた城跡である。

先端の円錐状の小山は背後を堀切で遮断した物見台となっている。続く稜線上には土塁跡も残り、稜線を最大限に活用した幅広い削平地が続き、鞍部に曲輪と陸橋を組み合せて、山裾に下る通路を設けて一つの区切りとしている。

鞍部から南の丘陵頂部まで再び陸橋でつないだあと、広い曲輪群を設け、末端を堀切で遮断している。この堀切の底は峠(堀越峠)となり、波多川沿いから反辺谷へ通ずる近道となっている。

この地点は、波多川沿岸から西部山岳 地を経由して神戸川沿岸に下り、更に石 見地方に通ずる街道の入口にあたる。

この城山は、地元では社日山と呼んで おり、主郭部の南端には祭壇状の高まり があり、近くに五神塔や石燈籠なども残っている。



第9図 高西城跡略測図

○三久保田城跡 (標高 220 m) 一略測図を省略一

中字別所にある城跡である。この地区は反辺谷川一帯を南側から見下す高台の上の集落で、 古い街道は、この城跡の真下から山岳地に入り、御幡、大山、吉野を経由して石見に通ずる。

城としての遺構は、小さな稜線を形成する山の中腹から山裾まで、階段状の曲輪を配置し、 最上段の曲輪は広い敷地となり、周りを土塁で囲んでいる。この位置は、下から曲輪群の中を 通る街道を見下しており、別所地区全域も見通し、北側正面に高櫓城がみえる。 (この山麓西 側には鈩跡が検出された。)

別所地区への進入路は、北側の台地の裾から迂回して登る道がいくつかある。その入口の細長い丘陵には「小丸」の地名が残り、頂部から山腹にかけて曲輪の地形がよく残されている。

○ 湯村城跡 (標高 274 m)

波多川右岸に突出した尾根で、位置は大字反辺と大字大呂の境界にあたる。

山頂の中央には櫓台を設けた形跡が みられ、この部分を主郭部と推定した。 近くの上下2か所の曲輪には円形の凹 地があった。

北側の山腹と山裾にも曲輪群が配置 されており、山裾の曲輪群の東端に湯 村神社跡地がある。(祭祀跡参照)

谷を挟んだ北側の山裾に張り出した 丘陵にも、曲輪らしい削平地があって、 谷の両側から城地への侵入路を見通す 格好になっている。

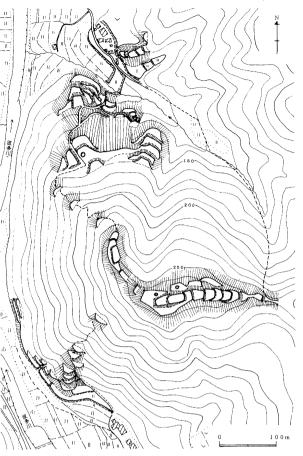
南西側の山腹から山裾にかけても削 平段があり、裾部は切岸となっている。

この山頂からの展望は、高櫓城を正面にみるもので、特に高櫓城の死角となる波多川上流部を見通す位置にある。

大字大呂・波多川流域の城跡

○**オノ峠城跡** (標高 275 m)

波多川右岸の台地上に集落(中字平野)がある。その東側の稜線上に設け



第10図 湯村城跡略測図

られた城跡で、この稜線は大字大呂と大字原田との境界となっている。

主郭となる部分は、峠の南側山頂と推定したが、ことは三方にのびる尾根に広い曲輪群を設け、東側の堀切で遮断した尾根の先端にも曲輪、腰曲輪を設けている。

南側にのびる稜線のつけ根は、削り落した壁として直下の曲輪から南下する稜線を陸橋にし、途中に迂回して登る曲輪を配置しながら、南部の広い削平地のある山頂部に達する。この山頂部は、稜線や鞍部を広く削平しており、一部に土塁で囲んだ曲輪もあり、この地点から堀割の道が原田地区の奥部に下っている。

この城跡についての記録とは断定できないが、大字原田の風土神社由緒記に「矢領山城主勝部筑前守」の名がみえる。

しかし、今までは矢領山城の位置が特定されていなかった。今度の調査によって、この城が 矢領山城に該当するものではないか、と思われる点がいくつかある。

それは、稜線に矢ノ谷があり、峠道は峰坂と呼ばれ、落城伝説がある。この周辺にはこれほどの規模の城跡が見当らない。

(才ノ峠城の名称については、地元で広く使われている地名を取り入れた。)

○ **茶磨山城跡** (標高 182 *m*)

波多川左岸に突出た尾根の先端にあり、地元では秋葉山とも呼び、山頂に秋葉神の祠がある。

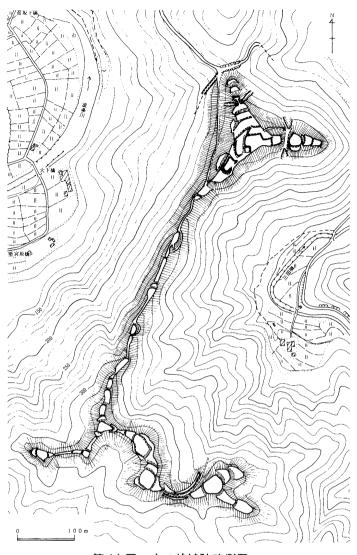
城山の中では小規模な部類に属 するものである。

主郭となる山頂には巨岩が多く、その間隙を削平して迷路のような複雑な地形にしており、 南東側の斜面は絶壁となる。

主郭部の西側の直下から緩斜 面が鞍部まで続くが、この斜面 には放射状に7条の竪堀群があ る。(注3)これは畝型阻塞と 呼ばれる緩斜面強化のための構 造で、西須佐地区では高櫓城と、 この城の南方の対岸にある八幡 山城でも確認されている。

畝型阻塞の上段には腰曲輪を 設けて、各堀底を至近距離から 見下している。

北西の尾根に続く鞍部は小さな堀切で遮断しているが、その西側の丘陵の背後を大堀切で切断し、独立峰に仕立てている。 北側の台地にのびる稜線は先端



第11図 オノ峠城跡略測図

まで、曲輪、堀切、土塁、腰曲輪などを連続して配置した構造がみられる。

○三の宮城跡(標高 290 m)

この城山は三の宮地区の中心部にあり、周りの山裾の3か所に出丸と推定される城郭がある。 特に東側山裾の三嶽神社の裏山一帯と、北側の寺床谷入口の寺床城跡(略測図を省略)は、 その地形をよく残している。

主な遺構は、南西側から波多川に張り出した尾根上に周囲を険阻な崖とし、主郭部を中心にして段差をもつ広い曲輪群を配置している。各曲輪は通路で結ばれて主郭を一周しており、遺構全体が原形をよく残したものといえる。

南側の峰に至る鞍部は両側を削り落した陸橋にした搦手とし、南側の東西にのびる稜線にも 曲輪群を陸橋でつないでいる。 この稜線の西側、主峰の直下は堀切と土 塁で遮断し、東側の丘陵頂部を中心に曲輪 群を配置している。頂部中央の小さな高ま りは祭祀跡とみられる。この稜線の南側山 裾には丸山城跡があり、この地点との比高 差は80 mである。

○ **竜体谷城跡** (標高 260 m)

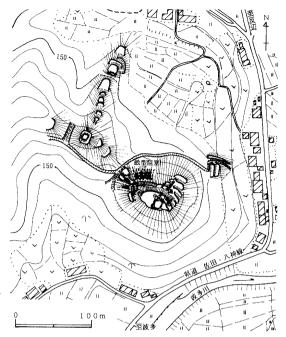
被多川右岸に東側から張り出した尾根の 先端に設けられ、波多川沿岸から東山中方 面に至る南北両側の谷の入口を見下してい る。

主郭となる頂部は3段の曲輪を石積みで 区画した段差にしている。(この石積みは 自然石を2、3段積みあげた素朴な作りで、 土止めていどのものである。)

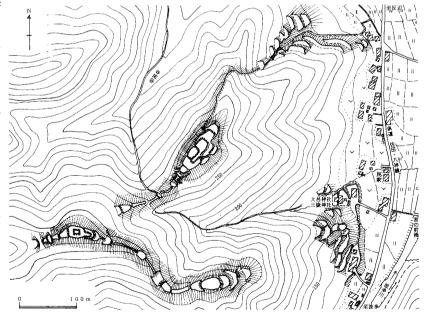
最上段の曲輪には、祭祀跡と推定した小 さな石積みの区画があった。

西にのびる稜線は、主郭の直とを削り落した壁と堀切で遮断するが、その先端にも曲輪 群を設け、この石の配列がみられた。

東側の稜線も主 郭部直下を削り落 した壁とし、三重 の堀切と土塁を連 の塩入路を遮断し ている。



第12図 茶磨山城跡略測図



北側へ下る稜線

第13図 三の宮城跡略測図

にも1本の堀切を設け、稜線上に小曲輪を山裾近くまで設けている。

この山裾を竜体谷川が西流するが、谷の対岸に「小丸」の地名が残る二つの小山(三の宮小 丸跡)がある。この谷にも東部の東山中地区に通ずる街道があることから、小丸は谷の入口の 物見と押さえの城であったことが考えられる。

丸山城跡

(標高170 m)

波多川左岸に北西側から岬状に張り出した 高台に設けられた城跡である。この台地の先端部と沖積地との比高 差は約30 mある。

城跡として特に目立 つ防御施設は認められ ず、台地上の緩斜面を 切岸で高度差を設けた 階段状の地形が山裾ま で続いている。

史料(注1)による (と、丸山城は高櫓城の、 支城で「城主熊谷民部、 少輔」の名が伝えられ ている。

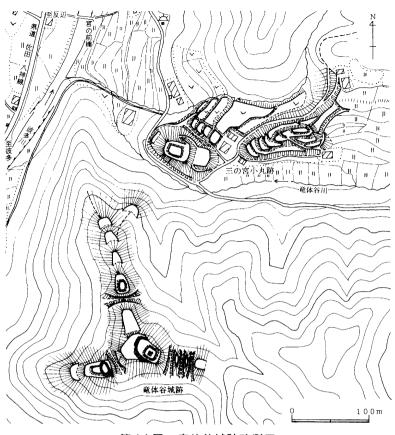
この台地を挾む南北両側の山には、三 の宮城跡と坂本・堂床城跡があり、対岸 の正面には八幡山城がある。

(北側山裾の栃畑鍛冶屋の伝承は古く、 先祖は出雲大社の本殿が十六丈から現在 の高さに建て替えられる時、金具を打ち に出たと伝えられている。)

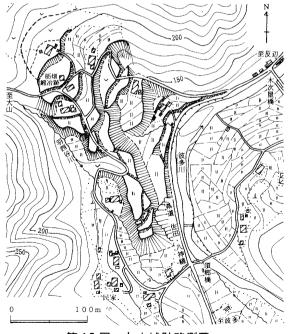
○八幡山城跡 (標高 176 m)

丸山城の対岸に南東から張り出した尾根の先端にあって、山腹には八幡宮の跡地がある。

城の構造は、山頂を主郭とし、背後となる南側を大形の土塁状に削り残して壁にしている。前方と側面には土塁や腰曲輪を設け、北東に下る尾根に曲輪を階段



第14図 竜体谷城跡略測図



第15図 丸山城跡略測図

状に配置している。

主郭部の南東側の斜面は削り落した壁とし、その下部の 稜線の南側は、波多川まで下る急峻な崖であるが、北側は 緩斜面になっている。この緩斜面には、稜線から下方に向 けて5条の竪堀群(畝型阻塞)(注3)が設けられており、 この構造を稜線の端からみると、五つの小山が並んでいる ようにみえる。これは下からの侵攻だけでなく、稜線上の 侵攻に対しても大きな障壁になっている。畝型阻塞の地方 的な呼び方として「連珠砦」があるが、その表現通りとも 言える地形である。

この稜線の先端も削り落した壁にしており、その下部に は堀切と反対側の斜面に、短い土塁を前面に設けた曲輪が

は堀切と反対側の斜面に、短い土塁を前面に設けた曲輪が 第16図 八幡山城跡略測図 ある。この部分の土塁は「巣」(注6)といわれる攻め出し口ともみられるが、背後に関連す

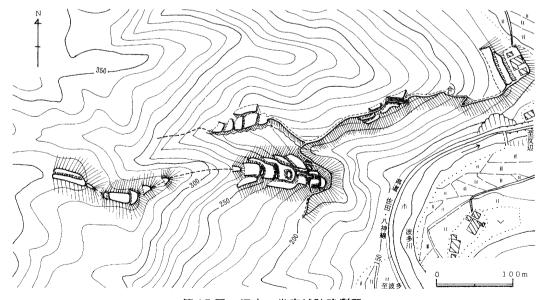
この八幡山城の西側川岸の小丘陵は、周囲を削り落した切岸とし、頂部から段状の削平地が 土塁で囲まれており、地元に城跡の伝承がある。 (庭反城跡) 一略測図省略一。

○坂本・堂床城跡(標高250 m)

る施設は消滅している。

波多川沿いの城跡の中では、最南端にあり、西側から張り出した急峻な尾根の中間に設けられている。

主郭部は階段状に設けた曲輪群の中央部と推定され、物見台らしい壇状の高まりがある。各 曲輪の間は迂回する堀割の道で結ばれ、下部の二段の曲輪は周りを高い土塁で囲み、南側の谷



第17図 坂本・堂床城跡略測図

に面して虎口が開かれている。

大手となる登り道は、丸山城跡の南側の削平段から山腹を横切るが、途中で曲輪群の中の堀 割の底を通過させている。

主郭部の西側は搦手となり、稜線上に曲輪を断続的に設けて谷底の道を見下している。谷底の道は荒廃しており、途中で消滅しているが、かつては西部の大山地区に通ずる街道で、城跡付近から山裾まではよく整った山道があり、途中に小堂が建てられている。

大字大呂・東山中地区の城跡

東山中地区は、佐田町中央部の南端にあり、標高300 m~350 mの山地に展開する高地の集落である。

との地区へは、周囲7方向から通路が集中する。つまり、山岳地帯を通過する街道の分岐点となる要衝であったといえる。

城跡は、各街道の出入口となる谷沿いの丘陵上に配置されており、その数の多いことから、 集団城郭とも言える形態である。

○南部の城郭群 (標高 340 m ~ 439 m)

東山中地区の南側の城跡は、南西の三方からの街道を見下す位置にあり、西端の標高439mの山頂には石碑の立つ曲輪を中心に、四方にのびる稜線上に曲輪を連続させている。

この山頂からの展望は、波多川下流部と左岸の山々が遠望できる。

北東に下る尾根の先端(四つの尾根)には曲輪、堀切、陸橋などを組合せた構造がみられ、 特に南側の尾根によく残っている。

中央の丘陵はY形の稜線が南北に細長く、二つの頂部からなり、北西側の頂部削平地には、 祭祀の礎石とみられる4個の川石が置かれている。

南東の丘の頂部が主郭と推定され、中央の櫓台跡とみられる高まりを中心に曲輪群を設け、 特に南に下る稜線に細長い曲輪を連続させている。山腹には等高線に沿って、ほぼ一周する通 路があり、途中に曲輪が設けられているが、北側の道路上の曲輪は屏風折の地形を残している。

東側の尾根の先端には、稜線上の2か所に削平地があり、陸橋で結ばれている。先端の削平 地の下部は周囲に曲輪群を設け、南側には3条の不規則な竪堀で山腹での横移動を封じている。

これら各城郭群の山裾を南下する道は、掛合町の穴見、波多方面に通ずる3本の街道がある。

○中央部の城跡(標高360 m)

東山中地区の中央で、東西に細長くのびる丘陵にあり、東端に円錐状の小山がある。この山は「すくも塚」と呼ばれているが、山頂の削平地のほかに遺構は見当らない。

すくも塚の西側一帯の丘陵は、草地造成によって原地形は損われているが、中央の山頂から のびる二つの稜線には曲輪群を連続させており、一部は土塁で囲んだ曲輪もある。山裾一帯は 削り落して切岸となっている。

・北部の城郭群(標高300 m~340 m)

西側の波多川沿岸からこの地区への進入路は、4か所の丘陵上から見下しており、最も重視



第18図 東山中地区城郭群略測図

されていた街道と思われる。

各丘陵とも、頂部から下降する稜線に階段状に曲輪を連続させている。

「東山中北谷」の南東側の大小二つの丘陵は、谷間を北上する間道と、北側の峠越えからの 道も見下す位置にあって、主郭と推定した山頂には櫓台を設けた地形がみられる。

北端の峠は、三の宮地区の竜体谷からの道が通じており、峠は両側の山裾から張り出した土塁で遮断され、中央を開いて虎口にしている。また、東側の南北にのびる稜線にも曲輪群を設け、稜線先端の曲輪は北側の谷を見下している。

○東浦城跡

(標高330 m)

東山中地区の中心から離れた北東の山で、この地点は東須佐地区の大字原田の台灣と三坂方面に通ずる街道の分岐点である。

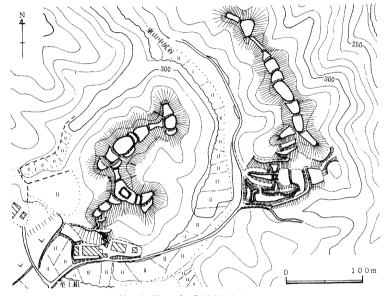
城跡は、谷を挾む二つ の山の山頂から山裾にか けて遺構がみられる。西 側の人家の裏山は、山頂 と稜線上に広い曲輪を配 置し、南西に下る斜面に

も曲輪を設けており、複雑な構造はみられない。

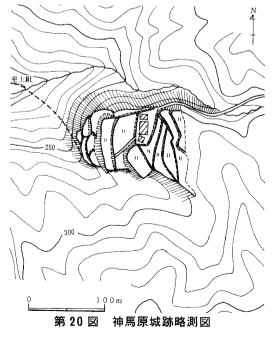
東側の山裾には、谷側から二又に分れる通路の奥を、高い土塁で囲んだ袋小路にしており、近世城郭の「隠郭」の形態に似た構造をみせ、正面上部の土塁の両側を開けて虎口にしている。また、袋小路の南側側面の土塁にも虎口が開けられているが、この谷側に面した土塁は、骨材として鉄滓が積まれている点が注意される。この北側の斜面と、北にのびる稜線上には曲輪群を連続させて両側の谷を見下している。(南側の道路沿いの露頭で、焼結した土や鉄滓が検出され、鈩跡と推定した。)

o 神馬原城跡 (標高 300 m)

東浦城跡が東山中地区北端の城であるのに



第19図 東浦城跡略測図



対して、この城跡は地域の南端にあって、波多川沿岸を見下す位置にある。この地点は、波多川沿岸から急峻な坂道の途中に開けた緩斜面で、川沿いから東山中地区に通ずる最短経路となり、間道の押さえとして配置された出城とみることができる。

城跡の遺構とみられる部分は、階段状の耕地の先端部で、下方に通ずる道を見下す形に、小さな曲輪群が設けられた単純な構造である。

この位置からの展望は、波多川下流部と対岸の山岳地帯が一望できる。視界の乏しい東山中地区の、監視と情報伝達の拠点であったことが考えられる。

この付近の地名には「御碕谷、山ノ神谷、隠尾、神馬原」などがある。

大字大呂・御幡地区の城跡

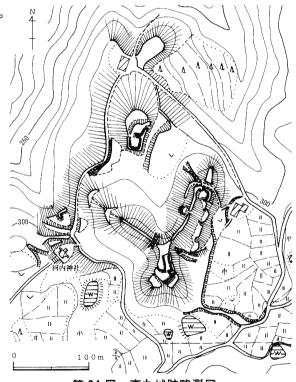
波多川左岸から西側に続く山岳地帯で、右岸の東山中に対して「西山中」と呼ばれる地域である。古い街道は、川沿の地帯から谷筋を通る道が多くあるが、主な道は大字反辺から別所、 御幡を経由して吉野を越え、神戸川沿岸に通ずる道がある。

○ **高丸城跡** (標高 330 m)

御幡地区の東側の地区で、反辺谷川に沿って三方の尾根が集中する独立峰にあり、山頂には土塁で囲んだ曲輪群を置き、北東にのびる稜線と東側山腹に曲輪を連続させている。稜線の裾部にも土塁で囲んだ曲輪や竪堀がある。

北側の山裾にも土塁で囲んだ3段の曲輪群があり、その下には街道が谷底から登ってきている。この道は山腹を横切って東側の河内神社を経て大山方面に続く。この神社境内は、周囲を土塁で囲んだ曲輪跡が転用されている。(神社は近世に移転されたもので、元は東山中地区に建てられていた。)

この周辺の地名は「大内、源氏原、蔵本、小丸」などがあり、高丸城のほかに



第21図 高丸城跡略測図

も城が存在したことが考えられるが、後世のかんな流しによって地形は大きく変化している。

○大丸城跡 (標高 270 m)

谷を挟んで、高丸城の西側に対向する城跡で、山腹一帯に棚田がひろがるが、前後は急斜面 となっている。北東にのびる稜線の先端は、背後を堀切で遮断した高地上に曲輪を設けた物見 台とし、反辺谷下流部を見下している。

主郭部は宅地付近とみられ、その周 辺は水田となっているが、それぞれ切 岸状の段差がある。南側の山腹に出丸 と推定される削平段があり、大丸と小 道で結ばれている。

o中屋城跡 (標高 320 m)

大丸城跡の南側の城跡で、谷の合流 点に張り出した稜線と、山腹に腰曲輪 や小曲輪群が展開する。

伝承によると、中世には「瀧上山・ 柏王寺」があって、広い範囲に堂塔が 建てられていたが、戦災によって全山 焼失した。

この山頂には鐘撞台があったと伝え られるが、その位置は不明である。

南西側の緩斜面は広く、近年の草地 造成のために原地形は損われているが 部分的に切岸の地形は残っている。

東側に突出した尾根にも、付根を堀切 で遮断し、その先端に設けた曲輪は谷川 沿いの地を見下している。

o 坂根城跡 (標高 310 m)

中屋城跡の南側の城跡で、北東に張り出した尾根上にある。

反辺谷川に面した斜面には棚田がひろがる。この耕地は、それぞれが大きな段差をもっているが、中には通路を迂回させていることから、曲輪跡と推定される部分もある。

稜線の先端は二つに分かれるが、付根は堀切で遮断し、先端部に曲輪が設けられている。特に北東に張り出した尾根の 先端には、高低差と迂回通路を組合せた 大形の曲輪の配置となっており、搦手と なる背後はゆるやかなやせ尾根となり、



西に細長く続く稜線には深い堀割の底の道が、 御幡地区西部の柏王の近くまで続いている。柏王 は中世の寺院の名称であることから、注意される 地域である。

o柏王城跡

(標高 330 m)

柏王の地名は、前述の 「瀧上山・柏王寺」の伝 説を裏付けたものと思わ れるが、この周辺で寺跡 等に類する遺構は発見されていな

寺に知り る 週 博は 光見 され しい ない。

この地域は御幡地区では最も高 位置の集落で、町内の東部山岳地 が一望できる。

城跡としては、まとまりをみせた遺構はないが、切岸状に段差をもつ耕地と丘陵上には、曲輪跡とみられる削平段や、竪土塁跡がある。

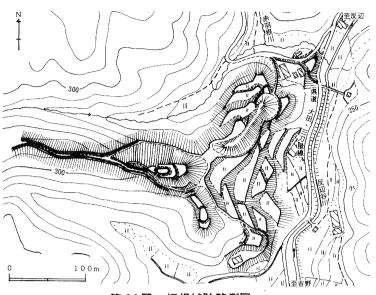
南側の谷に突出た台地には土塁 で囲んだ区画や、その中に壇状の 高まりがある。

北側の谷を囲む周りの丘陵には 屛風折を形成する曲輪跡もみられる。

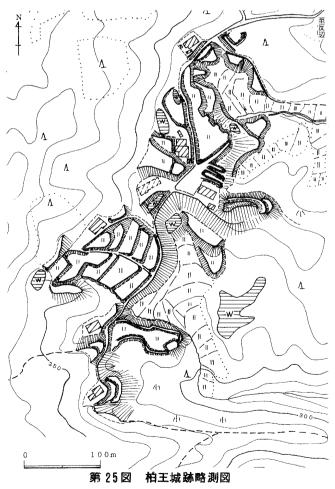
o 前岩瀬城跡 (標高 333 m)

坂根城跡の南側の山で、東に張 り出した尾根上にあって、街道の 分岐点を見下している。

城跡の遺構は、尾根の先端から 三方にのびる稜線上に曲輪を連続 させている。



第24図 坂根城跡略測図



稜線の頂部には櫓台を設けた形 跡があり、南に下る稜線には腰曲 輪と、下段の広い曲輪を土塁で囲 み、更にその下部にも腰曲輪を設 けた構造がみられた。

西側の鞍部から下る谷にも曲輪 を連続させ、更に西側の丘陵上に も土塁で囲んだ広い曲輪があり、 稜線上の削平地は主峰の付け根ま で達している。通路は検出できな かったが、背後は柏王に近い位置 になる。

o重羅城跡

(標高 300~370 m)

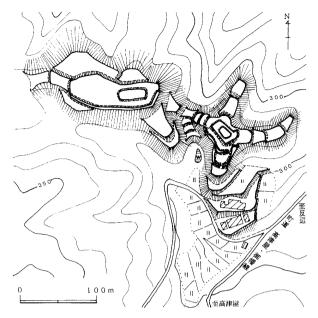
前岩瀬城と谷を挟んだ南側に対 向する城跡で、南北二群

北側の城跡は、やせ尾 根と急峻な両側の山腹に 曲輪を設けているが、特 に東側斜面の大小の曲輪 は、反辺谷川沿いの街道 を眼下に見下している。

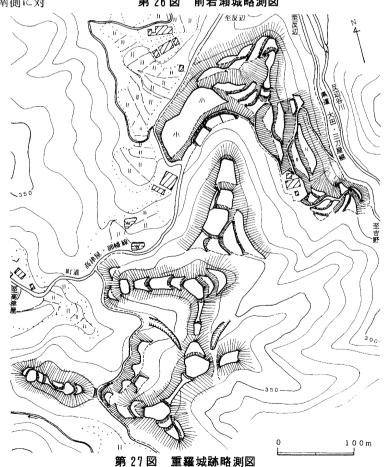
の城郭に分けられる。

南側の山は、ゆるやか な稜線となっている。各 尾根に曲輪を連続させ、 西端の峠まで達している。

この峠は、旧神門郡と 飯石郡との境界となって いたもので、この北東側 斜面には屛風折の曲輪跡 がみられる。堀割の底を 通る峠の両側の丘陵にも 曲輪群が設けられている が、西側の小丘陵は北西 側の斜面にひろがる大字



第 26 図 前岩瀬城略測図



高津屋の上部の集落を見下している。

(「重羅」の名称は、この周辺の小字名「重羅垣内」を採用した。)

大字大呂・大山地区の城跡

この地区は、波多川沿岸から神戸川沿岸に通ずる街道の途中にあり、広域的にみると、東部 出雲から石見部に至る山中の一拠点である。

地形は標高 350 m前後の丘陵に囲まれた高地の集落で、この地域への通路は 7 方向から集中している。

城跡とみられる遺構は地域全体にひろがっており、どれが主郭となる部分か不明瞭である。



第28図 大山城郭群略測図

o大山城郭群 (標高 350 m~ 400 m)

この地域で特に遺構が明瞭な部分は、北側の東西に細長い二つの丘陵と、西側の低地に突出した4か所の小丘陵と、中央の山塊の西側山裾である。

ここでは周囲を高い土塁で囲んだ「黒構」の曲輪や、土塁の一方を開口した虎口、切岸、屛風折、畝堀を組合せた曲輪群など多彩な構造をもって、谷沿いの道を見下している。

東側の山裾の露頭では、黒ボク土で埋もれている小規模な「片薬研堀」の遺構断面が観察され、上段の削平地に何らかの建物の存在を思わせる。

東側は波多川に面した 斜面で、ここでは棚田が 広く展開している。

下部の人家周辺は曲輪 跡とみられる地形が南北 に連続して、下からの通 路を見下している。

この位置は「丸山城」 の真西にあたり、近距離 で結ぶ間道がある。

この地区全体に溜池が 非常に多く、その位置は 人家の近くや道沿いにあ ることが注意される。

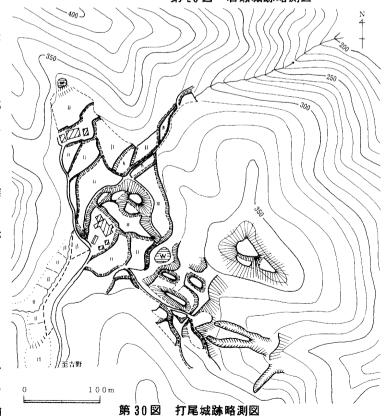
o岩瀬城跡

(標高 320 m)

反辺谷川沿いの地域から大山地区に向う一つの 入口にあたり、山腹の曲



第29図 岩瀬城跡略測図



輪群は階段状に稜線近くまで設けられ、通路が鞍部に達している。

鞍部から南側の尾根にかけては、削平地が広く一部に土塁跡も残り、南端の広い曲輪には櫓台跡と推定される高まりがある。この位置は大山方面への道を眼下に見下すもので、監視を目的とした城跡とみられる。

o 打尾城跡 (標高 320 m)

主郭となる部分は東) 側の丘陵付近と推定されるが、かんな流しに / よって原形は大きく損われ、鞍部に土塁跡と , 東側斜面に竪堀がみられるほか、明瞭な遺構はみられなかった。

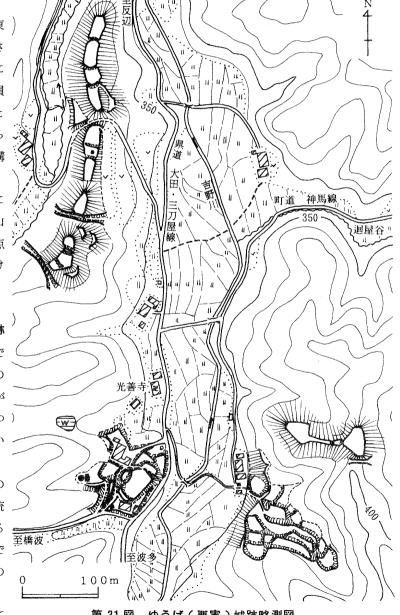
谷沿いの道の途中に 波多川流域と東部の山 岳地が一望できる地点 があり、物見台を設け た形跡がみられる。

大字吉野地区の城跡

佐田町南端の盆地で 標高330m~350mの 細長い沖積地がひろが る高地の集落で、かつ) ては神門郡に属していった。

この地区から西側の 山を下れば、神戸川流 域の上橋波地区に至る という街道の中継地で あり、各地に向う道の 分岐点でもあった。

軍事的に重視されて



第31図 ゆうげ(要害)城跡略測図

いたことは、永禄年間の雲芸攻防戦の戦記にも登場する地名であることからも推測できる。

城跡は二群に分けられるが、いずれも街道を見下しながら、地域全体を見通すという位置に 設けられている。(この地域の特徴として、製鉄遺跡が非常に多いことで、この中には山城の 時期に対応するものの存在も考えられる。)

oゆうげ(要害)城跡(標高360 m)

吉野地区北部の城跡で、沖積地との比高差は最も高い位置で40 mある。これは地域全体が高 所にあることを示している。

城の名称は、地元伝承の「ゆうげ」を採ったが、この地名は要害が変化したものといわれている。

城跡は南北に細長く続く丘陵の山裾と頂部にあって、その南端の地名が「ゆうげ」である。 ここは街道の分岐点となるところで、丘陵の付け根を二重堀切で遮断し、その先端の高台に 階段状の曲輪が設けられている。南北にのびる丘陵は小刻みに谷が切れ込んでおり、各谷の奥 には水源池があり、中には前面を土塁で遮へいした水源跡が残っている。

寺(光善寺)の北側には「土井」の地名があり、西側の稜線の南北両端を堀切で遮断した曲 輪群がある。更に北にのびる稜線を大堀切で再び遮断(現状は峠道となっている)し、その北 側稜線にも削平地が連続して下降する。

吉野川を挟んで、ゆうげの東側の山腹と、北側の尾根の先端にも削平地がある。南側の斜面の最上部には、西側面を土塁で遮へいした構造がみられ、迂回する通路などから城跡とみることができる。この部分は、ゆうげ城の死角を補完する出丸であったと思われる。

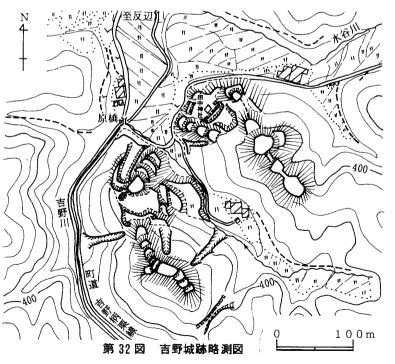
o吉野城跡

(標高 420 m)

吉野地区南部にあって、 小字名「丈山」となって いることから踏査をした 城跡である。

この城跡は、谷の分岐 点の北側に張り出した独 立峰で、その前面の東西 の山裾にも、出丸跡と推 定した曲輪群が設けられ ている。

城の遺構は、北側に張 り出した緩斜面の尾根の 先端を、細長く削り取っ た堀割にして、その東側 斜面から堀割を見下す曲



輪群を階段状に配置している。その南側は鞍部となり、広い平地が東西にひろがっているが、 ここまでの通路は東側の人家前から曲輪群を通り抜けて登っている。

北側の田中神社周辺と対岸には、大小の曲輪群があり、これらは出丸跡のようである。

注1. 渡邊彜著『出雲稽古知今図説』(天保年間に成立)

「反部村 高矢倉ノ城主本庄越中守経光、島根郡本庄村ノ城主ナリシガ今此所ニ城ヲ築 テ居住ス、此枝城トテ同村小矢倉ノ城 屏風山ノ城 須佐村ニ尾崎山ノ城又下リ尾崎、 立花ノ城抔五ケ所有リ子細不詳尼子方ヨリ毛利方ニ移ルト云。」 「大呂村 丸山ノ城主 熊谷民部少輔」

2. 勝田勝正校注『尼子毛利合戦・雲陽軍実記』

米原正義校注『陰徳大平記』

以上二つの戦記中の関係する記述は、永禄元年に石見地方の大半が、毛利軍の制圧下におかれるという本庄常光の報告に応じて、尼子晴久は反撃し、同年7月に石見東部での合戦に、 毛利軍は後世「新原崩れ」と呼ばれる敗北をした。

この時の状況を『雲陽軍実記』は、高櫓城を拠点として「歩卒の大将を河副美作守にそ 定めらる。此の河副は万夫不当の勇猛にて、殊に歩戦に馴れたる人なれば、二千五百人 を添へて、別所、西山中、吉野に分かり、野伏せして折々は三瓶山の麓より、銀山近辺 へ出て、夜働きし、敵の糧道を妨げ、奪ひ取って敵軍を苦しめけり………」と伝えてい る。

3. 島根県下で畝型阻塞が確認されている城は、京羅木山城郭群、勝山城跡(広瀬町)、山吹城跡(大田市)、周布城跡(浜田市)、一本松城跡(金城町)、井村城跡、三隅城跡、鐘ノ 尾城跡(三隅町)、七尾城跡、角井城跡(益田市)がある。(第3回全国城郭研究セミナー ・1986)山根正明。

このほかに八幡山城跡(頓原町)、高櫓城跡、伊秩城跡、立花城跡、茶磨山城跡、八幡山城 跡(佐田町)がある。

- 4. 山上の防御施設に対する山麓の居住地を指すが、平時のものではなく、軍営的居住地と考えられている。町内では「根小屋」の地名(小字名)は見当らないが、城跡の近くに「輪ノ内」が散見される。
- 5. 上下を粘土層など、不透水性の地層で制限された滞水層を満たしている地下水が上位の地盤によって加圧され、自噴に近い状態で湧出する地下水(地学辞典・平凡社刊)高櫓山は安山岩質の凝灰岩で構成されているが、下層となる山裾一帯は海成積成層で特に泥岩の優勢な地層となっている。

- 6. 「 # 土居」とも呼ばれる施設で、小規模な土塁を設けて、城内を見透かされないようにしたもので、これによって矢石を防ぐことができる(中世城郭辞典・東京堂出版)
- 7. 城内が見透かされないように土塁を高くしたもの。『築城記』に「城の内も見えず、又土 居も高く家も見えざるを黒構と云也」とある。(日本城郭大系・人物往来社)

3. 生產遺跡

鈩 跡

生産遺跡は、古来の製鉄法すなわち砂鉄還元の製鉄遺跡である鈩跡が多い。

この地方の鉄生産については『出雲国風土記』の記述の中で、須佐郷を流れる「波多川」の解説のあとに「鉄有」と記して、この地方で古代から砂鉄製鉄が行われていたことを伝えている。東須佐地区の大字宮内の「尾崎横穴群」では2群1号穴の玄室内で、須恵器と共に鉄滓が1個出土しており、風土記の時代に先行する古墳時代に、既に鈩製鉄が行われていたことを示唆するものとして注意される。

今度の調査によって発見、または再確認された製鉄遺跡は 26 か所で、佐田町全域で 60 か所近い鈩跡がある。これらはすべて地表面の観察によるもので、それも地名(小字名)の検討によって得た予備的な知識や、古老の証言によって鉄滓の堆積地から追求して発見した遺跡がほとんどである。

古い形式の鈩は小規模で、立地条件も谷に面した山腹の小さな削平地などが利用されており、多くの遺跡は、地下に埋没している可能性がある。今度の調査でも堆積土の下部で検出された遺跡が4か所あった。また荒れた山林のために行手を阻まれて、踏査が及ばなかった地域などを考えると、今までに発見された遺跡は一部分であって、今後の調査によってその数は更に増えることが予想される。

≪近世末期の鈩跡≫

近世末期に操業された鈩は、藩行政によって規制され、その体制は少数の鉄山師によって経営されたもので、大字大呂地区の鈩では飯石郡吉田村の田部氏の経営による「堂ケ谷鈩」があり、大字吉野地区は神門郡に所属していたことから、神戸郡奥田儀村の桜井氏の経営による「吉原鈩」と「梅ケ谷鈩」がある。

この三か所の鈩跡は、周辺の地形から推定して、大規模なものである。

特に吉原鈩は、鈩文書にもたびたび見られるもので、山腹に広く堆積している鉄滓の量から みて、数次にわたる操業がなされたものと思われる。

≪中世の山城の郭内及びその周辺の鈩跡≫

大字反辺の「垣内鈩跡 は、須佐地区から出雲方面に通ずる旧街道沿いの山腹にあり、削平地の規模は全長7.0 mほどの小区画であることから、野鈩跡と推定した。この位置は「舟津城跡」の奥部である。

「高櫓城跡」の主郭部北側の鞍部では、2か所で焼結した土層が観察され、鉄滓が散布して おり、鈩と鍛冶跡が存在したものと思われる(土落鈩跡)。 また目田池の東岸とその北側山 裾でも鉄滓が検出されたが、遺構は見当らなかった。

「屛風山城跡」の北側鞍部でも小規模な鈩跡がある(矢源寺奥鈩跡)。

別所の「三久保田城跡」の山裾には「鈩」の地名があり、ここでは大形の鈩跡があり、金屋 子神の祠もある(別所鈩跡)。

大字大呂の「丸山城跡」の西側山裾に「栃畑鍛冶跡」があり、城主が病死した際に廃絶したという伝承がある。

東山中地区の「東浦城跡」では、曲輪を囲む土塁に鉄滓が使用されており、近くの露頭で焼 結した土層があることから、中世にさかのぼる鈩跡(東山中鈩跡)の存在を示唆している。

大山地区では「打尾城跡」の下部谷川に沿う水田の崖下で、鉄滓の堆積層があり、谷川で小 形の鉛が発見された。ここでは2か所に鉄滓の堆積地があることから、複数の製鉄遺跡があっ たことが考えられる。(打尾1号、2号鈩跡)。

大字吉野では「ゆうげ城跡」の東側斜面で、鉄滓や焼土が検出されたが、遺構は確認できず 埋没しているようである。

室 跡

窯跡は大字吉野に1か所、瓦窯跡がある。これは明治以降のもので、長くは続いていなかったようである。

位置は「ゆうげ城跡」の東側山裾の県道沿いの畑で、現在でも焼土や瓦の破片が散布している。

4. 祭祀跡

祭祀跡は、神社、寺院、堂跡のほか、民間信仰の対象になっていた「才ノ神」「山ノ神」「 水神」などの石碑や、鈩、鍛冶の守護神として祀られた「金屋子神」の祠も多い。

城跡に祭られている神社には「八幡宮」と「秋葉神」が多く、東山中の城跡では「みことさん」と呼ばれる祭神不明の碑があった。

地名(小字名)が残る寺跡は、 大字反辺に「明蔵寺」「小御堂」 があり、大字大呂には「清泉寺」 「慶雲庵」「善正寺」「大願寺」 「久光寺」「無生堂」のほか、「 寺床」がある。

御幡地区には「柏王」の地名があるが、これは中世の寺院の名称と伝えられている(26頁参照)。 大字吉野には「弁堂」のほかに「上堂、下堂、堂ノ元、堂迫」など、堂の字をあてた地名が多い。



熱田宮の神護寺と伝えられる「清泉寺」跡地

神社に関する地名は「熱田宮」「八幡宮」「布施の宮」があり、この社は現在は近くの神社に合祀されている。

地名に現われない神社として、大字反辺の「湯村城跡」の北側山裾の「湯村神社跡」がありての社は多倍神社に合祀されている。

東山中地区には「河内神社跡」があるが、この社は御幡地区に移されている。

「熱田宮」は、石清水八幡宮の別宮跡で、近世の初期に大字反辺に遷座され、後に多倍神社 に合祀されている。「清泉寺」は、その神宮寺であったと伝えられている。(2頁参照)

5. 古墓・塚 、

宝篋印塔、五輪塔、石積みなどの古墓は、高櫓城の周辺に点在しているが、その数は少ない。

高櫓城跡の主峰南側の台地先端には、「殿様墓」と呼ばれている 2基の宝篋印塔がある。2基とも 下部の基壇は欠失し、風化のため 細部の構造は消えているが、整っ た形を残している。

この周りに散乱している大小の 石は、墓域を区画した石郭だけで なく、石積みの墓もあったと思わ れる。

この南側の多倍神社の裏山の削 平段に、宝篋印塔1基分と五輪塔 の残欠(風空輪)がある。宝篋印 塔は、塔身と相輪の上部が欠けていた。



高櫓城跡の殿様墓



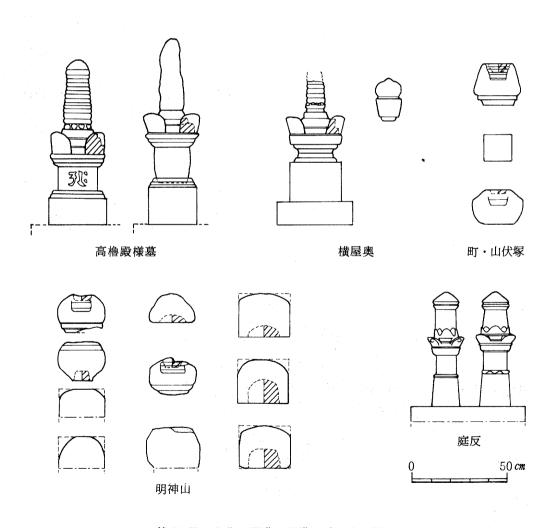
庭反城跡の便化した宝篋印塔

波多川に面した南東側の棚田の 畦に「山伏塚」と呼ばれている2 基分の宝篋印塔の残欠があるが、 風化による損傷がはげしい。

波多川と須佐川合流点に張り出した「明神山城跡」の曲輪群は、 墓地に転用されているが、その一 隅に宝篋印塔と五輪塔の残欠が積 み重ねられていた。

これらの石材は、軟質の凝灰岩 であるため損傷がひどく、原形が かろうじて識別できるものであっ た。石積みの墓も高櫓城跡周辺に点在するが、明神山城跡の南側の丘陵に多くみられ、とこには後世に建てられた城主・熊谷広実の墓碑もある。

大字大呂の「庭反城跡」の頂部の曲輪群も墓地に転用されているが、ことでは宝篋印塔を便化した2基の石塔がある。1基は一石作りであるが、別の1基は相輪に相当する部分がはめ込みになっている。



第33図 古墓・石塔・石塔の残欠実測図

V むすび

今年度をもって3か年にわたる遺跡調査が終わり、佐田町全域の踏査が完了した。

発見された遺跡の中で、特に中世の山城跡と、鈩跡が多かった。これは大形の遺跡で目につきやすいということだけでなく、全町で 5.500 か所の地名 (小字名) におうところである。

地名は、かなりの数が整理され、消滅しているとはいえ、その大勢は失われておらず、多く の示唆を与えた。

その地名の中で最も多くみられたのが城や鈩に関するものであり、それほど地域住民と深いかかわりをもっていた証左である。

踏査の時期は、春から秋にかけてという、季節に限定されたことから、生い繁る雑草や樹木 に阻まれて、小規模な遺跡や遺物が検出できなかったことは今後に残した大きな課題である。

古代遺跡として明らかなものは、大字大呂の八幡古墳がある。

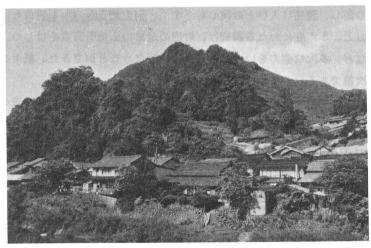
巨石を使った横穴式石室のとの古墳は、羨道入口付近が欠失しているものの、玄室の形は無 袖形で、横田町、頓原町など奥出雲地方でも発見されており、山陽側に多く後期古墳の一般の 形式として盛行している。

このことから、当地方も山陽側の影響を受けることは十分考えられることで、この古墳は山 陽側の古墳文化の系統を引いている、ということができる。

城跡は西須佐地区に35か所あり、全町で80か所を超える数になる。

その中でも大字反辺の 高櫓城跡は町内随一の規 模で一城別郭の配置構造 や、特異な施設がみられ るだけでなく、その終末 期が知られていることは 歴史的にも価値のある城 跡といえる。

特異な施設とは畝型阻 塞を指すが、これは昨年 までの調査で大字一窪田 の伊秩城跡、大字宮内の 立花城跡でも発見されて



前方の小山には物見跡がある。高櫓城跡の遠景(左側) (北側から撮影)

おり、今度の調査で大字大呂の2か所の山城でも発見された。近い例では頓原町大字角井の八幡山城でも発見されている。

こうした山城には、高い石垣や建造物はなく、土木工事によって設定された高低差と屈曲性 を組合せた造作にすぎず、今日われわれが見る城の印象とはほど遠いものである。

しかし、踏査によって得た感触は、部分的に破却され、埋立てられているとはいえ、現在で も活性のある機能体として迫力を感じるものである。 近年、中世城郭の調査、研究が各地で行われている中で、本調査の結果が更に広範囲にわた る資料の比較、検討や、考古学的方法による調査などによって、その発生、分布形態、築城編 年などの手がかりとなることを期待したい。

・ 鈩跡については、近世末期の鉄山師の経営によって操業時期の知られている高殿鈩のほかに中小規模の鈩跡も多く、その数は町内全域で60か所になる。

中小規模の鈩跡は山腹の斜面などにあり、立地条件が悪いことから長い年月の間に埋没した ものや、深山のため、踏査が及ばなかった地域もある。また、鈩製鉄業が元来、移動性をもっ たことなどを考え合せると、遺跡の数は更に増えることは間違いない。

城跡の郭内で発見された鈩、鍛冶跡の中にその当時の城に付属した施設であったことも考えられる。

また『出雲国風土記』の記述や、近くの横穴から須恵器と共に出土した鉄滓は、遠く古代にさかのぼる遺跡の存在を示唆している。

今後、*鈩跡*についても、考古学的、自然科学的な調査がなされることにより、それが鈩研究 の一助ともなれば幸いである。

祭祀跡は社会の表面で活動を続けてきた仏教、神道にかかわる遺跡のほかに、霊地の観念や 伝承にもとずく原始的信仰や、民間信仰の対象となった石碑などがあり、地名にもさまざまな 表現で残されている。

しかし、現在は人びとの関心もうすく、何を祀るものか不明のものが多かった。

以上、3年度にわたる調査は、町内の遺跡の土地所有者をはじめ、古老の方がたの助言や案内など、多大な協力をいただいて順調に行なうことができた。紙上をもって厚く感謝申しあげる次第である。

この調査結果は本町の埋蔵文化財のすべてではなく、今後の調査を一つの手がかりとして、 今後、本町の遺跡の実態を明らかにする、そのいとぐちとなることを期待してむすびとする。

湖文 照 鸳

島根県教育委員会 『島根県生産遺跡分布調査報告書·出雲部製鉄遺跡』(1983)

島根県教育委員会 『島根県遺跡地図(I)出雲·隠岐編』(1987)

加藤義成校注 『修訂出雲国風土記参究』(1981)

蓮岡法障 『飯石郡頓原町、比丘尼塚古墳調査報告概要』(1974)

勝田勝年校注 『尼子毛利、合戦雲陽軍実記』(1978)

米原正義校注 『陰徳大平記』正徳二年板本(1984)

村田修三編 『図説中世城郭事典』(1987)

鳥羽正雄 『日本城郭史の再検討』(1980)

中世城郭研究会編 『中世城郭研究』(1987)

佐田町 『佐田町史』(昭和51年) (1976)

佐田町教育委員会 『佐田町内「字」調査表』(1985)

佐田町教育委員会 『私たちの郷土佐田町』(1987)

佐田町埋蔵文化財詳細分布調査報告 3 西 須 佐 地 区

発行者 島根県簸川郡佐田町大字反辺

佐田町教育委員会

1989年3月25日 印刷 1989年3月31日 発行

印刷者 島根県出雲市今市町 宇田印刷



文 化 財 愛 護シンボルマーク